＜研究ノート＞

中間言語像の変遷：生成文法を理論的枠組みとして

山　根　麻　紀

成人が非母語である何らかの言語（外国語または第二言語）を習得する際，その発達段階にあるものを「中間言語」(interlanguage) という。この研究ノートでは，生成文法（Chomsky 1965, 1981, 1995 他）理論に基づく言語習得論の中でとらえられてきた中間言語について述べる。文法理論の変容にともなって，それを仮説の拠り所としている中間言語の姿も変わってきた。この変容の姿を，実際の研究を例にとりながら簡単にまとめてゆきたいと思う。

まず初めに，生成文法系の言語習得論で前提とされる事を挙げる。

(1) ヒトという種には，生得的な言語習得装置 (Language Acquisition Device) が備わっている。これによって我々は，重篤な障害がなく，通常の言語環境に置かれた場合には，誰に強いられずとも自然に言語（母語）を習得し始める。

(2) 言語獲得装置には，普遍文法 (Universal Grammar) というものが含まれている。

(3) 普遍文法は，自然言語の「青写真」のようなものだと仮定される。それは，全ての自然言語に共通する原理 (Principles) と，諸言語の分岐点であるいくつかのパラメータ (Parameters) から成る。パラメータはスイッチのようなもので，その各々の値の組み合わせが，諸言語の違いを生じさせるものだと考えられている。ここでは，パラメータの初期設定は，全てニュートラルだと仮定する。

(4) このシステムによって，子供の母語習得は，不十分かつ環境によって様々に異なる言語データにもかかわらず，比較的速く・母語話者とし

て完璧な文法に至って完成される，とされる。子供はすでに言語の原型を持っていて，あとはトリガーとなる言語データによって，母語のパラメータ（＝スイッチ）値を決定するだけでよいからである。

生成文法理論でまず問題にされたのが，「プラトンの問題」をいかに解決するか，ということであった。「プラトンの問題」とは，「なぜ私達は，限られた乏しい（言語）体験から，豊かな（言語）知識体系を有するようになるのか」という疑問である。チョムスキーは，これを解決するために，言語習得とその必要条件をヒトの生物的条件としたのである。したがってこの理論的枠組みでは，言語は文化／社会的現象ではなく，言語を脳の産物として捉えられている。

さて，この考え方を成人の非母語習得にもあてはめると，次のような仮説がたてられる。

(5) 成人が言語を習得する際にも，生得的な言語習得装置は機能している。
(6) したがって，その習得過程の中間言語は，いかなる過程にあったとしても，普遍文法の許容するバリエーションの範囲内にある。
(7) 言い換えると，成人のいかなる段階の中間言語にも普遍文法の原理が作用しており，パラメータ値の変動する範囲内でそのバリエーションは変動する。
(8) このシステムによると，成人の言語習得の過程は，子供の母語習得と同様パラメータのセッティングによって進展してゆく。その過程で，母語でも当該外国語（第二言語）でもない，第三の自然言語様の現象が出現する可能性がある。

つまり生成文法系の成人言語習得論では，研究対象となる中間言語はあくまで脳の産物として捉えられる。これに沿って成人の中間言語を論ずるにあたり，音声の習得や，明らかに便宜に由来する言い回しのような現象は，研究対象から排除される。

まず音声習得についてだが，上記のように普遍文法を以て完成するのは「文法」である。言語音声の習得は，それとは異なったモジュールで行われるとされるため，生成文法理論の枠内では論ずることができない。また，

便宜的な言い回しについては，例えば以下のような発話が例として挙げられる。

(9) *I am orange juice.
（私はオレンジジュース（をお願いします）。）

日本語の copular「です／だ」の用法の多様性（いわゆる「ぼくはウナギだ」文）の一例であるが，これは母語の語彙を当該外国語でそれに対応する（と話者が考えた）もの（ここでは，英語の copular である be 動詞）に「便宜上」入れ替えたものと考えられる。このような単語と単語の対応で生じる現象には，上に述べたようなパラメータ値が関与しているとは分析しがたい。したがってここでは，このような例は発話の表層で現れるものとし，論から外すこととする。

この研究ノートの構成は，以下の通りである：まず I では，生成文法理論が成人言語習得論に応用されはじめた黎明期（1970～1980 年代）に，中間言語がどのように分析されていたかを述べる。II では，1980 年代中盤から 1990 年代中盤にかけて，統率束縛 (Government and Binding) 理論の発展とその応用方法の進展によって様変わりした中間言語の捉え方をまとめる。III では，1990 年代中盤以降，極小理論 (Minimalist Program) が言語習得論にどのような影響を与えたかを論じる。

I 「UG は成人の言語習得過程では作用しない」(No-Access Hypothesis)

成人による非母語習得は，母語習得とは観察的に異なっている。第一に，子供が，通常の言語環境にあって重篤な脳障害等がない場合には，ほとんど個人差なく言語を習得するのに対し，成人の言語習得には段階的・結果的な個人差がある。第二に，成人が習得する言語の最終段階の状態 (final state) は当該言語の母語話者のものとは異なる場合が多い。

この観察から，言語習得には臨界期 (critical period) が存在するという説があげられた。臨界期は，ほぼ思春期（10～12 才）以前に該当し，それ以後の言語習得は，脳の言語習得に関する器官の変化（または停止）によって困難になるという説である（Lennenberg 1967, Krashen 1973, Curtiss 1977 他）。

Clahsen and Muyskin (1986) の研究は，この仮説を支持するものである。この研究では，母語がロマンス語の成人ドイツ語学習者の長期発達過程データと，ドイツ語母語習得データが比較されている。Clahsen and Muyskin は特に，ドイツ語の語順の発達に着目した。その結果，成人ドイツ語学習者の発達過程は子供とは異なっており，原理やパラメータとは無関係な，推測に基づく「人工的かつ恣意的な」文法ルールの作成が見られるとした。

このような立場から，成人の第二言語習得に関して以下のような説が主張された。

(10) No Access Hypothesis

言語習得器官（およびそこに備わっている普遍文法）は，臨界期を過ぎると機能しなくなる。成人が言語を習得しようとする時機能するのは，その生得的機能ではなく，それ以外の，一般的情報処理能力・問題解決能力だけである。

この立場から捉えられた中間言語は，すなわち，上に挙げた生得的言語獲得装置というものの機能を全く想定しないものである。このような中間言語は，普遍文法の許容する範囲を逸脱したものであり，パラメータというものの範疇外に成り立っていることから，自然言語の体を成すものではない。そうなると，成人後に習得した外国語は，どれも言語としての機能も疑問視されるようなものとなってしまう。

その後この仮説に対して，多くの反論とそれを支持する実験データが提示される。それには，次の II で述べるようなさらなる文法理論および習得理論の発展を待たねばならなかった。

II 「UG は成人言語習得において作用する」

統率束縛理論 (Government and Binding Theory) が1986 年に発表され，照応系・WH 移動等，様々な文法現象が理論化された。時を同じくして，言語習得論の分野でも，様々な習得理論が発展し始めた。習得理論とは，文法理論が習得段階において，具体的にどのように発達するのかという問題に対し提示されるものである。たとえば，プラトンの問題（言語データの不完全さと母語文法の完璧さのギャップ）は，パラメータの初期状態が

どのように設定されていることで解決可能になるのか。また，言語原理は当初から全てそこに出揃っているのか，または知的発達にしたがって順に出現するものなのか，等の問題を扱うものである。

これらの習得理論は，特に成人言語習得論では，特に当該外国語対母語という観点から問われてゆくことになる。ここではまず，習得理論を中心に据えて中間言語を明らかにしようとした研究を挙げ，次に統率束縛系の文法理論を用いた研究を紹介する。いずれの研究も，上の I で論じた No Access Hypothesis に対し，普遍文法は成人言語習得において機能するという，Full Access Hypothesis という仮説を支持するものである。

(11) Full Access Hypothesis
言語習得器官（およびそこに備わっている普遍文法）は，子供の言語習得の場合と同様に臨界期以降の成人の言語習得に作用する。普遍文法はパラメータを言語の差異の分岐点として持っていることから，成人言語習得もこのシステムに従い，パラメータをリセットすることによって進む。中間言語においては，母語と当該外国語間でリセット途中に，その値が第三の自然言語の値と一致するという可能性がある。

Finer and Broselow (1986) は，韓国語母語の成人英語学習者を対象として，その中間言語における再帰代名詞 (-self) の研究を行った。再帰代名詞は照応系 (anaphor) の一種であり，文中で一定の規則に従ってその指示物をしめす先行詞を持たなければならない。この規則は，言語によって異なっている。たとえば，

(12) Mike_i said that Bill_j persuaded James_k to consider Charlie_l fond of himself_x.

という文中で，文末の himself (x) は，韓国語でこれに該当する文は全ての固有名詞 (i～l) で解釈可能である。日本語の再帰代名詞の解釈もこれと同様である（「マイクは，ビルがジェイムズにチャーリーが自分を好きだと考えるよう説得したと言った」という文では，「自分」はどの登場人物としても可能である）。一方，英語では himself (x) はCharlie (l) でしか解釈され得ない。

Finer and Broselow (1986) は，習得理論のひとつであるサブセット・プリンシプル (Subset Principle) を用いて仮説をたてた。これは，言語データに否定証拠 (negative evidence) すなわちある構造が非文法的であるという明示がないにも関わらず（非文法的な構文は，ただ聞こえてこないだけである），母語話者は非文法性を明確に判断できるようになるという状況を解決せんとする説である。これによると，まず母語習得をする子供は，最も「禁則の厳しい」セットから始める。それがもしその当該言語に符合するならば，子供はそのデフォルトセットを保持する。一方，もし当該言語がそれよりも「ゆるい」規則に従うものだとしたら，それは肯定証拠 (positive evidence) として言語データの中に存在するはずであるから，それに応じて子供はデフォルトルールを書き換えてゆく。

Finer and Broselow (1986) はこのサブセット・プリンシプルを成人言語学習者に応用して仮説をたてた。まず，成人の非母語習得が母語習得と同じ場合，被験者はより「禁則の厳しい」英語様のセットから始めるので，英語のテスト文を与えた場合パフォーマンスレベルが高いことが予測される。一方，このプリンシプルが作用していず，母語転移 (transfer) が起こる場合，被験者は母語である韓国語のより「厳しくない」ルールを適応することになるので，英文でのパフォーマンスレベルは低く，英語の再帰代名詞の習得には否定証拠が必要となってくる。

Finer and Broselow の実験の結果は，そのどちらの予測にもあてはまらなかった。9 割の被験者達が，動詞が屈折している補部を持つ文（例：Mike_i knows that Bill_j painted himself_x）で正しく英語の照応を理解していたが（$x = j / i^*$），不定詞補部を持つ文（例：Mike_i asks Bill_j to paint himself_x）での正答率は 6 割弱で，多くの被験者が $x = i / j$（両方の固有名詞を受けることができる）と解釈した。この，句構造の違いが照応と関係があるというパターンは，ロシア語の再帰代名詞に見いだすことができるが，英語にも韓国語にも存在しない。

ここから言えるのは，中間言語の姿はおそらく，習得理論だけでは把握できない，ということである。文法理論があり，パラメータ値の中間的な設定あってはじめて，「第三の自然言語」の姿をした中間言語が予測可能になる。次に挙げるのが，そういった研究例である。

上の I で挙げた Clahsen and Muyskin (1986) の分析に対し，J. duPlessis, D. Solin, L. Travis & L. White (1987) は，Clahsen 等と同じデータを用い

て再解釈を試み，異なった仮説を提示した。まず duPlessis 等は，中間言語の発達過程が母語習得の場合と違うからといって，それが普遍文法の不在を示唆するわけではない，とする。論拠は，母語習得の初期状態がニュートラルであるのに対し，成人の場合すでにひとつの言語の母語話者である（すなわち，定まったパラメータ値を持っている）所が当該言語の習得の始まりである，ということである。

ドイツ語（アフリカーンやオランダ語も同様）には，主節中の屈折した動詞が文の 2 番目（COMP＝補文標識主要部）の場所に来るという，V2 ルールがある。そして主語や目的語といったようなものが，その上（COMP の指定部）に生じる。ただし補文中の動詞は，COMP に dass という補文辞が入り，それが屈折 (INFL) 部を統率しているため，動詞は動かないで当初の位置（動詞句主要部）にとどまる。

(13)

a)	[Die Kinder	[COMP	haben	das Brot	gegessen]]
	(the child		have	the bread	eaten)
b)	[Das Brot	[COMP	haben	die Kinder	gegessen]]
	(the bread		have	the child	eaten)
c)	[Ich glaube	[COMP	dass	die Kinder	[INFL e das Brot [V gegessen]]]]
	(I think		that	the child	the bread eaten)

duPlessis 等は，学習者の母語（この場合ロマンス語）と当該外国語（ドイツ語）の差異を鑑みながら，以下のようなパラメータを設定し，その結果がどのようになるか予測をたてた。

(14)

a) 文 (IP) の左側付加可能

ロマンス語・英語では，文の左側に要素を付加することができる

（例 [Yesterday, [in their cozy kitchen, [IP the child ate the bread]]]）

ドイツ語・アフリカーンではその限りではない

（主文であれば V2 ルールに従って動詞は必ず 2 番目に来る）

b) 主要部語順パラメータ

ロマンス語・英語では主要部が先（動詞句は VO の語順）になる

ドイツ語・アフリカーンでは主要部が後（動詞句は OV の語順）になる

c) ロマンス語・英語では，動詞は屈折主要部 (INFL) に移動する
（例 I think that the child ate the bread）
ドイツ語・アフリカーンでは補文標識 (dass) が存在する時は，動詞は屈折主要部 (INFL) に移動できない（(13)-c 参照）

ロマンス語を初期設定状態としてドイツ語に至るためには，これら 3 つのパラメータ値を全て変えなければならない。これらのパラメータ値が，a) → b) → c) の順序でリセットされると，Clahsen and Muyskin (1986) で観察された語順習得の発達過程が全て説明可能になる。また，その過程で a) だけがリセットされた時点の文法は，イディッシュ語のものと一致するという。

中間言語が第三の自然言語のような形を呈する可能性は，このように，文法理論に基づく仮説をもってはじめて具体的なものとなった。

III 「UG は成人言語習得において作用する：では，どのように？」

1995 年に発表された極小理論 (Minimalist Program, Chomsky 1995) で，生成文法理論は大きく様変わりする。それまでの統率束縛理論では，言語によって異なった様態を見せる文法現象を，深層構造 (Deep Structure)／表層構造 (Surface Structure)／理論形式 (Logical Form) という 3 層の場を用い，移動や統率といった概念を用いて，厳密で（したがって重たい）理論が構築されてきた。

ところが，極小理論では「深層構造／表層構造」というシステムも統率という概念も排除された。言語によって異なる様々な文法現象はもはや，機能範疇 (functional category) の違いに帰されるかまたは，音形 (Phonological Form) の要求として処理される。音形の要求は，ルールによって記述されるのではなく，各々の語彙の特性とされる。

このような理論の変化にともなって，中間言語の研究の焦点はおのずと，機能範疇の素性の研究に移ってゆく。また同時に，語彙（形態素）の習得と統語の習得の分化がより進むようになった。つまり，中間言語において，言語のモジュール性がより明確な形をとって現れてきたということが言え

るかもしれない。ここではそのような研究例を，ひとつ以下に挙げる。

Yamane (2003) は，日本語を母語とする成人英語学習者で，英語の長距離 WH 疑問文（例：Who do you think he saw?）の研究を行った。その結果，学習者は母語にも英語にも存在しないが，他の実存する自然言語（ドイツ語方言）で文法的な部分 WH 移動を含む疑問文（例：What do you think who he saw?）を多く発話した。

Yamane は，ここに 2 つのパラメータが関連していると分析した。ひとつは機能範疇の素性に関する値で，もう一方は語彙の特性に関する値である。

(15)

a) 機能範疇に関するパラメータ

英語では COMP が WH 語を要求する

（例）Who do you think he saw? / *Do you think he saw who?）

日本語では COMP が WH 語を要求しない

（例）君は彼が誰を見たと思うの？）

b) 語彙に関するパラメータ

英語では，WH 語が抽象的な（音に現れない）WH 素性と，その「容器」である（音として現れる）WH 語に分離できない

日本語では，抽象的な WH 素性と，その「容器」である WH 語は分離できる

日本語母語話者がこの構文を習得するためには，これら両方のパラメータ値を変えなければならない。ところが，その中間の状態，すなわち a) が英語に準じてセットされ，b) が日本語のままというセッティングはドイツ語（方言）に相当する。部分 WH 移動では，"(音に現れない WH 素性) do you think who (WH 語) he saw?" のように WH 語が分離して現れるが，文頭位置が WH 語を要求するので，what がそこに WH マーカーとして挿入されるのである。このことから，成人の中間言語は母語の影響を語彙の点で受けながら，UG の範疇にあるパラメータ値をリセットする形で発達するという結論が導き出された。

この研究は，成人言語習得におけるパラメータ・リセッティングの存在を支持している。また，このデータに関する限りでは，機能範疇の素性の

リセットは早く，語彙の特性の習得はそれより遅い，と言うことができる。この，言語のモジュール性を示唆する現象は，まだ不明な点も多く，これからのさらなる研究が待たれるところである。

IV おわりに

成人の中間言語は伝統的に，「さらなる発達が望まれる，何かしら不完全な，言語と呼ぶのもはばかられるもの」のような扱いを受けることも多々あったように思える。しかし，生成文法理論の枠組みでとらえると，確かにそれはヒトという種に固有な，言語獲得を運命づけられた脳の産物である。

そしてこれは，発達心理学的に興味深くもあるが，自然言語のバリエーションを研究する上でも，意義深い研究対象であると思われる。ヒトの脳という場での，母語と外国語（第二言語）という２つの言語のせめぎあいは，文法理論の構築にとっても興味深く，有益な現象に違いない。

参考文献

Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax.* MIT Press.

Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding: The Pisa Lectures.* Dordrecht: Foris.

Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program.* MIT Press.

Clahsen, H. and Muysken, P. (1986) The availability of Universal Grammar to adult and child learners. *Second Language Research* 2: 93-119.

Curtiss, S. (1977) *Genie: A Psychological Study of a Modern-day "Wild Child."* Academic Press.

duPlessis, J., Solin, D., Travis, L. and White, L. (1987) UG or not UG, that is the question: A reply to Clahsen and Muysken. *Second Language Research* 3: 56-75.

Finer, D. and Broselow, E. (1986) Second language acquisition of reflexive-binding. *Proceedings of the North Eastern Linguistic Society (NELS)* 16: 154-68.

Hulk, A. (1991) Parameter setting and the acquisition of word order in L2 French. *Second Language Research* 7: 1-34.

Krashen, S. (1973) Lateralization, language learning and the critical period: some new evidence. *Language Learning* 23: 63-74.

Lennenberg, E. (1967) *Biological Foundation of Language.* Wiley.

MacLaughlin, D. (1996) Second language acquisition of English reflexives: Is there hope beyond transfer? In A. Stringfellow, D. Cahana-Amitay, E. Hughes & A.

Zukowski, eds., *Proceedings of the 20th Annual Boston University Conference on Language Development*, Vol. 2. Somerville, MA: Cascadilla Press. pp. 453-64.

Schwartz, B. and Sprouse, R. (1994) Word order and Nominative Case in nonnative language acquisition: A longitudinal study of (L1 Turkish) German Interlanguage. In T. Hoekstra & B. D. Schwartz, eds., *Language Acquisition Studies in Generative Grammar: Papers in Honor of Kenneth Wexler from the 1991 GLOW Workshops*. Philadelphia: John Benjamins. pp. 317-68.

Yamane, M. (2003) On interaction of first-language transfer and universal grammar in adult second language acquisition: WH-movement in L1-Japanese/L2-English interlanguage. Ph.D. dissertation. University of Connecticut.